

「異変」

「はあ……はあ……吾もまだまだ……じゃ……」

出雲荘の自室に帰ってきた月海は、汗をびっしょりとかいていた。

日課として続けていること、美哉による稽古は厳しいものがあつたが、結も同じく稽古をつけてもらっていたので、月海はここでも絶対に負けられないと意地を見せ、毎日懸命に美哉との特訓に打ち込んでいた。

「……」

月海は汗で濡れてしまった下着を取り替えるために、服を脱ぎ始める。

そして腰からパンツを下ろすと、何を思ったのか、近くに置いてあつたコップの中にそれを指で押し込んだ。

コボコボコボ

手を介し、コップに水が注がれる。

「もつと……濃いのが……必要なのじゃ……」

下着は水を含み、その形を大きく変えていく。

コップの中を所狭しと入っているそれを見て、月海は指でかき回すように深層へと押し込んだ。

チャプチャプチャプ

ある程度かき混ぜたことを確認すると、月海は納得した様子でコップから下着を取り出した。不思議なもので、コップに入つた水は濁ることなく、むしろ月海の下着が入つたことによつて調和しているように見えた。

（中略）

「セキレイの繋がリ」

「ミナト……水は、今日もなくて……の……」

「しょうがないな。じゃあ口を開けて、月海」

月海は最初から持つてくる気がない様子で水の無いことを告げると、喜んで受け入れるように、言われるがままに口を開いた。

「ミナト……あーん……ん……ふ……っチュッ……んんっんっ　チュッチュパッ……」

水を持つてこなくなつてから何日が過ぎただろうか。

月海は毎日皆人の部屋に来ては、こうして口内を好きなように舐めさせている。

皆人からすれば、唾液を求めて口内を舐め尽くそうとしているだけだったが、月海からするとそれは恋人による求愛のディープキスであり、深く這わす舌もよだれも、想い人から求められるという極上の甘美な行為だった。

そして最初は戸惑いを見せていた月海も、今ではこの行為を悦んでおり、皆人のセキレイとして、まだ誰もやったことがないであろう行いに酔いしれていた。

月海を抱き寄せると、彼女の大きな胸は皆人の前で強調される。月海は部屋に入った時から、これから起こるであろう情事を想像しているからか、乳首の先端が尖るように張っていた。

それを皆人に擦りつけるように押し当て、更なる快感を得ようとする。

舌を互いに絡めたり、月海の方から皆人の口内に侵入したりと、もはや皆人が襲っているようには見えなかった。

「ミナト…ミナト…ちゅ…ちゅっ」

「うん…おいしいよ月海…」

皆人はというと、一日一回、必ず月海の液体を摂取しないとイライラして、自制が利かずに暴れそうになる。そして、月海と常に一緒にいないと理性が保てないという副作用、体質になっていた。

月海という時だけ、皆人は平常心を保ち、落ち着いて生活ができるのだった。

また月海の液体を求めて行っている行為も、徐々にエスカレートしていった。

もはや皆人にとって月海は、魚にとつての水のような、確実に無くてはならない存在になっていた。

（中略）

「このおっぱいの中にも、月海の水は入ってるのかな？」

「や…やめよミナト。そこには多分、入ってはおらぬ……」

皆人の絡みつくような視線と突然の発言に驚き、月海は拒むように手で隠そうとするが、服の上からでも分かるほどに、月海の乳首は尖るようにツンと張っていた。

「舐めて欲しそうに見えるけど、舐めない方がいい？」

「……………み、ミナトが望むなら…す…少しだけなら……」

「ちゃんと言わないとやってあげないよ月海？」

「の、飲むがよい……っ」

月海が顔を真っ赤にして声を絞り出すと、皆人は月海の乳房を包んでいる白い布をスルッと下へとずらした。

我慢していたものが飛び出すようにして、月海の胸がぷるんと弾かれる。

一体今までどれだけ我慢をしていたのか、ピンク色の綺麗な乳首は、早く早くと言わんばかりに先端を膨らませておねだりをしていた。

「えっちななあ月海。ずっと我慢してたんなら、言ってくればいいのに…はむっ」

「あつつんっんあっ ミナトお…ああ…はああああ…ッ」

「チュッチュパッちゅぱっちゅッ はあはあ…水出るかな…チュパッ」

胸を責められるのが弱いのか、月海は乳首をくわえられるとビクビクと体を震わせた。

初めてこんな事をされた、そして恐らくは皆人のセキレイの中で自分が初めてこんな事をされたという現実が、月海の悦びを何倍にも増幅させ、これ以上のない快感を脳内に分泌させていく。

「あああああっあっあっんんうううッ！」

ぴゅっぴゅっ！

「んっ すごい！ 何か出てきたよ月海！」

「はあはあ…うあ…ああ…あゝっ」

月海が悦びに声を上げた瞬間、乳首の先から水滴が飛び出した。

皆人はその液体を舌で舐め上げると、より濃度の高いその味に歓喜した。

もっと味わいたい衝動から、更に搾りだそうと月海の乳房を両手で揉みしだいてゆく。

「あっミナトっ駄目じゃ！ そんなに激しくする…なッ」

ピュッピュッ！ ピューッ！

セキレイとして葦牙の欲求に応えたいという想いからか、月海の乳首からは先ほどよりも多くの液体を飛び散らせた。

「はあ…ピチャッピチャ…じゅるるるるっ…じゅるるるるっはあっ」

「んうううッ吸うなあ…ッミナト…！止まらなッい…ッっ！」

乳首に吸い付くようにして、皆人は湧き出てくる液体を口の中で堪能した。

迫り来る快感に悶えるしかない月海だったが、皆人が求めるほどに、胸から溢れ出る液体は勢いを増し、止まらなくなっていた。

ピュッピュッ！ ピューッ！

「ああああっ止まらぬ…！ ミナトッミナトもうやめ…ッ」

「じゅるるるるっすごいっチュパッ沢山出てくるっ！ じゅるるるっ」

止む事なく続く快感。月海は幾度となく絶頂に達していた。

（体験版はここまでになります。）

お読みくださり、本当にありがとうございました。  
よければ製品版をよろしく願っています。